

## 14. 三井大坂両替店「聞書」に記録された災害とその発地域

長島雄毅・横田崇

### 1. はじめに

人々が過去の災害に対してどう向き合ってきたのか、過去の災害が人々の生活にどのような影響を与えたのか、これらを追究することは現代の災害・防災を考えるうえでも示唆を与える。これまでの歴史災害に関する研究では、被害状況の復原や社会的な影響を主題とするものと比較して、災害に対する認識やその見方を把握しようとする研究は史料的制約から相対的に少数といえる。こうした点から、本年度の研究では特に近世の災害に対する人々の認識を把握するための基礎的な調査として、次の2点に留意しながら、資史料の所蔵調査・収集と利用可能性について若干の検討を行った。まず1点目として、長期間にわたって災害を記録した資史料に着目した。ただ、当然のことではあるが、そうした近世文書は豊富にあるわけではない。しかし、災害に対する見方や認識の変化の検討は、可能な限り継続的に記録された史料によって進められる方が好ましいといえるだろう。2点目として、近世の災害史研究では取り上げられていなかった企業的な組織に注目した。そもそも近世社会における経営組織は家計と未分離な状況にある「家業」を営む人々が大半であった。しかし、現代社会とのつながりを意識した研究を進めるうえでは、企業、もしくはそれに類似する組織を対象とすることには大きな意義があると考えられるだろう。

以上をふまえて資史料の所蔵調査等を進めた結果、本研究では三井大坂両替店の「聞書」に着目することとした。そして、そこに記録された災害を整理・分類して、その傾向について若干の考察を行っていく。「聞書」は近世の代表的な豪商である三井家の店舗のひとつである大坂両替店で100年以上にわたって記録された経営文書である。つまり、そこに記録された災害は、企業的な活動を背景とした認識が反映されたものとして把握することができる。以下では、三井家と「聞書」の概要を述べたうえで、記録された災害の検討を進める。

### 2. 三井家と大坂両替店「聞書」の概要

三井家は、三井高利が17世紀後半に伊勢松坂から江戸へ進出して、「現金掛け値なし」に代表される革新的な商法によって急成長した豪商である。17世紀末には、江戸・大坂・京都のいわゆる「三都」に呉服・両替の店舗を展開し、それらの経営は京都に置かれた「大元方」によって統括された。すなわち、「大元方」が三井家の全資産を管理したうえで、本店一卷（呉服部門）と両替店一卷（両替部門）に営業資金を融資し、両一卷はそれぞれ営業活動を展開した。また、各店舗の経営体制は当時としては高度に組織化されており、店の規則や営業書類が体系化され、その運営は多数の奉公人によって担われた（西坂2006, 三井文庫2015）。

三井の各店舗間では経営に関わって収集された全国の各種情報が緊密に交換・共有されており（岩田1993）、そうした情報のうち大坂両替店において取捨選択のうえで記録されたものが「聞書」である<sup>1)</sup>。「聞書」は寛延4（1751）年から明治6（1873）年分の合計8冊（「一番」～「八番」）が作成され、文政12（1828）～弘化2（1845）年分（「三番」）を除く7冊が現存している<sup>2)</sup>。その内容は、政治・商業・訴訟・一揆・火事・自然災害・対外関係・風説など多岐にわたり、瓦版や絵図などの刷物を貼り付けた箇所も多いが、これらの情報の取捨選択の基準は明確でない（三井文庫2011）。したがって、記録された個々の情報に正確性が担保されているとはいえないこと、翻刻版が一部のみしか刊行されていないことなどの理由からか、意外にもそれほど多くは利用されていない<sup>3)</sup>。歴史災害の点からは東京大学地震研究所（1981-1994）に各地震に関わる事項が記載されているものの、地震以

外の災害については対象外である。こうした点をふまえ、本研究は、長期間にわたって継続的に諸事象を書き留めた「聞書」の利点を重視する立場から、歴史災害研究に活かすことを試みたい。

### 3. 「聞書」に記録された災害と被災地域

「聞書」に記録された災害を分類のうえで、10年単位で集計したものが表1である。ここから明らかなように、「聞書」には火災や事故などの局地的な災害や地震・噴火のような広域的な災害が混在する形で記録されている。なかでも最も記録数が多いのは火災であり、災害に関する記事の半数以上を占めている。次いで、大雨やそれによって引き起こされる洪水などの風水害が15%程度を占めるほか、地震、落雷、噴火などが記録されている。

一般的な近世文書と同様に「聞書」では各記事の書式が統一されておらず、内容には精粗の差が大きい。例えば、火災の記事であっても、日時と出火場所のみ記載されているものがある一方、絵図を添付したうえで類焼の範囲や鎮火の時刻などに至るまで記録しているものもある。また、1項目に複数の災害に言及しているものもあれば、特定の災害が複数の記事に取り上げられているケースもある。こうした書式の不統一性について、表1は「災害件数」を基準として作成している。つまり、1つの災害に対して複数の記事がみられるものについてはまとめて1件とみなし、地震や噴火など幅広い地域や複数の都市での被害状況が記載されているものも1件にまとめて取り扱っている。

以下では、火災・風水害・地震・落雷・噴火それぞれの発生地域について、若干の整理と検討をしていく。

表1 「聞書」に記録された災害

年	火災	風水害	地震	雷	噴火	疫病	事故	獣害	合計
1757-1760	2								2
1761-1770	2								2
1771-1780	2	2			1	1			6
1781-1790	3	1			1				5
1791-1800	9	4		1	1				15
1801-1810	5	4		2			1		12
1811-1820	12	3	2	1	1				19
1821-1830	7	1				1			9
1831-1840									0
1841-1850	3	1	1						5
1851-1860	9		3	1		1		1	15
1861-1870	9								9
1871-1873	2								2
不明	2								2
<b>合計</b>	<b>67</b>	<b>17</b>	<b>6</b>	<b>5</b>	<b>4</b>	<b>3</b>	<b>1</b>	<b>1</b>	<b>104</b>

資料：「聞書」各巻を基にして作成。

注1) 1828～1845年は史料が現存しない。

注2) 被災状況を主題とした記録を対象としている。

注3) 複数地域での被災がみられた場合も1件として扱っている。

#### 3.1 火災

火災に関する記事は対象期間を通じて常に一定数がみられ、発災頻度の大きさと関心の高さをうかがうことができる。図1は「聞書」に記録された火災を地域別に示したものである。大坂が最多で、それに匹敵するのが江

戸、そして京都が少数みられる。これらは、大坂はもちろんのこと江戸・京都も両替店の店舗が置かれた都市にあたる。また、時系列を詳しくみると、明治2（1869）年の遷都以降の記事に限定すれば、東京が多数を占めるようになっている（8件中7件）。各地で発生した火災の詳細な分析は今後の課題となるが、現時点で特徴を読み取ることができるものとして、大坂における火災について述べておく。大坂では、記録された30件の火災のうち21件を「道頓堀」での火災が占めている。このうち、15件については「道頓堀出火宝暦七年より文化十三年迄五十七年之間十五度」として、宝暦7（1757）年から文化3（1816）年にかけての火災をまとめて書き記しているものである。こうした記録方法がとられた理由は現時点では不明だが、道頓堀が大坂のなかでも火災の頻発する地区として認識されていたのは確かであろう。当時の道頓堀は芝居小屋の立地する都市の盛り場の要素を有する地区であったが、一方で、三井大坂両替店の位置した高麗橋一丁目とは2km以上も離れていた。言い換えれば、「聞書」に記録された大坂での火災は、必ずしも両替店の周辺で発生したものとは限らないのである。

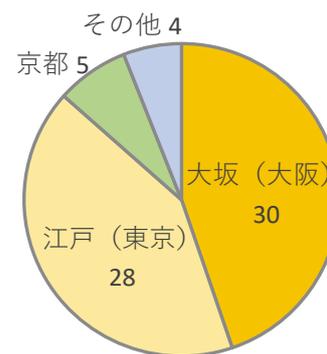


図1 火災の記録数（地域別）

### 3.2 風水害

表2のように、「聞書」には合計16件の風水害が記録されている。これらについても、火災と同様に大坂や江戸での被害を記録しているケースが多くを占める。ただし、東海道筋や中山道筋など大坂と江戸を結ぶ経路にあたる地域のほか、三井の店舗があった伊勢（松坂）、また意図は不明であるが仙台などにおける洪水も一部記録されている。時期的にみると、いずれの風水害も旧暦の6～9月に発生しており、これらをグレゴリオ暦に換算すると6月末から10月初頭に該当する。つまり、梅雨から秋ごろの時期にあたり、特筆すべきような災害はこれらの時期に集中していたことがうかがわれる。また、風水害の中でも洪水が最も多く記録されており、経営活動や人々の生活に対する影響の大きさを物語っている。例えば、享和2（1802）年には淀川の堤防が決壊、大洪水によって大きな被害が生じたことはよく知られており、「聞書」が当時の社会における関心事を記録していたことがうかがえる<sup>4)</sup>。

### 3.3 地震

「聞書」に記録された地震は計6件である（表3）。これらをみると、江戸・京都・東海道筋における大地震が特に関心を持たれていたといえる。一方、それ以外の地域で唯一取り上げられているのが弘化4（1847）年の「善光寺地震」である。この地震では約8000人の死者が発生したとされており、その被害の甚大さから例外的に記録されたものと推察される。19世紀に発生した地震では、文化元（1804）年に出羽国（現在の山形県）で発生した象潟地震（死者300人）や文政11（1828）年の越後国（現在の新潟県）で発生した三条地震（死者1,600人）などがそれぞれの地域で大きな被害をもたらしたものの「聞書」には記録されていない。これらから「聞書」への記録の有無は、発生地域と被害状況の大きさが考慮されていたと考えることができる。ところで表3の地震について記述内容に着目すると、最も詳細に記録されていたのが嘉永7（1854）年の安政東海地震である。安政東海地震をめぐっては、多くの文書や瓦版などの史料が現存しており、甚大な被害が出たことが指摘されてきた。「聞書」においても、ほかの災害と比較して多くの分量が費やされ、被害状況を記載した刷物が添付されている。他方、これと連動して発生した安政南海地震についての記述は安政東海地震の記事に付け加えるような形で記されるのみである。これについての明確な理由は不明だが、被災地域の経営上の重要度の大小によるものと推察される。

表2 「聞書」に記録された風水害

元号	年	西暦	月	災害	場所
安永	2	(1773)	6	洪水	伊勢
安永	3	(1774)	6	大風雨	大坂周辺
天明	6	(1786)	7	洪水	江戸
寛政	3	(1791)	8	大風雨・大風	大坂・京都・奈良
寛政	3	(1791)	8	大風・洪水	江戸・小田原・東海道筋・中山道筋・関東・利根川
寛政	3	(1791)	9	大風雨	江戸
寛政	4	(1792)	7	洪水	松坂
享和	2	(1802)	7	洪水	大坂（摂津・河内）・江戸・東海道所々
享和	2	(1802)	7	龍巻	京都
文化	4	(1807)	9	堤防決壊	淀川
文化	5	(1808)	6	橋落水	江戸
文化	8	(1811)	6	洪水	大和国
文化	9	(1812)	6	洪水	上州・野州
文化	9	(1812)	7	洪水	奥州仙台
文政	6	(1823)	8	大風雨	江戸
嘉永	1	(1848)	6	洪水	淀川筋
安政	3	(1857)	8	大風雨・洪水	江戸

表3 「聞書」に記録された地震

元号	年	西暦	月	日	主な被災地	マグニチュード	備考
文化	9	(1812)	11	4	江戸	$M \approx 6.5$	
文政	2	(1819)	6	12	京都など	$M = 7\frac{1}{4} \pm \frac{1}{4}$	
弘化	4	(1847)	3	24	信州	$M = 7.4$	善光寺地震
嘉永	7	(1854)	6	14	京都・近江・東海道筋	$M = 7\frac{1}{4} \pm \frac{1}{4}$	
嘉永	7	(1854)	11	4	遠州・駿州など	$M = 8.4$	安政東海地震
安政	2	(1855)	10	2	江戸	$M = 7.0 \sim 7.1$	江戸地震

注) マグニチュード・名称は、宇佐美ほか（2013）による。

### 3.4 落雷

表4は落雷による災害を示したものである。特徴としては、5件中3件が寺院への落雷を記録したものであることが指摘される。そのうち、寛政10（1798）年の京都・方広寺への落雷については被害状況とともに、慶長15（1610）～19（1614）年にかけての建立時の費用が書き上げられている。当時の社会では寺社の再建などにあって、商人や庶民が寄進する、あるいは費用を割り付けられることが珍しくはなかった。したがって、この記事においては、大仏殿が再建されることになった場合、三井がどの程度の費用を捻出することになるのかが念頭に置かれていたのかもしれない。文化9（1812）年の京都と安政3（1857）年の大坂における落雷の記事ではそれぞれ市中の広い範囲での被害が書き留められている。つまり、都市住民の活動に少なからず影響を与えたであろう大規模なものが記録されていることがうかがえる。

表4 「聞書」に記録された落雷による災害

元号	年	西暦	月	被災地
寛政	10	(1798)	7	京都・方広寺大仏殿
享和	1	(1801)	12	大坂・四天王寺
享和	2	(1802)	6	奈良・唐招提寺
文化	9	(1812)	6	京都洛中洛外
安政	3	(1857)	8	大坂

注) 寛政10年の落雷について、三井文庫(2011, 193)には「東大寺大仏殿落雷にて炎上」と立項されているが、明らかに京都の方広寺に関する内容であるため、内容に沿った分類としている。

### 3.5 噴火

噴火による被害の記事を示したのが表5である。記録されたものは4件のみであるが、うち3件(桜島・浅間山・雲仙岳)は人的被害の大きさから記録されているとみてよい。もちろん、これらと同時期には天明5(1785)年の青ヶ島(死者130~140人)、文政5(1822)年の有珠山(死者103人)、1841年:口永良部島(多数)など多数の死者が発生した噴火があった。このように人的被害をもたらしたにも関わらず、「聞書」に記録された噴火と記録されなかった噴火がみられたのも、三井の活動に対する影響の大小であろう。青ヶ島・有珠山・口永良部島などはいずれも三都を中心とした経済活動との関わりはそれほど大きくなかったと考えられる。一方で、例外的に記録されているのが文化12(1815)年の阿蘇山の噴火である。この噴火では直接的に人的な被害はなかったようであるが、降灰による田畑や草木への被害がみられたことが記録されている。しかし、この噴火があえて記録された理由は現時点では明らかにはされておらず、今後の課題としなければならない。

表5 「聞書」に記録された噴火による被害

元号	年	西暦	月	火山	死者	備考
安永	8	(1779)	10	桜島	150余	「安永大噴火」。噴石・溶岩流などによる被害。
天明	3	(1783)	7	信州浅間山	1,151	火砕流、土石なだれ、吾妻川・利根川の洪水。
寛政	4	(1792)	2	雲仙岳	約15,000	「島原大変肥後迷惑」。地震及び岩屑なだれによる被害。
文化	12	(1815)	4	阿蘇山		

注) 死者数・被災状況は気象庁ウェブページ内「過去に発生した火山災害」を参照した。

[https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/volcano\\_disaster.htm](https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/volcano_disaster.htm) (最終閲覧日:2019年4月18日)

## 4. おわりに

本稿では三井大坂両替店の「聞書」に記録された記事のうち、災害に関するものを整理・分類して、その傾向について若干の検討を行った。その結果、記録された災害は火災や風水害といったものが大半を占めており、そのほかに地震、落雷、噴火などがみられた。当時のように構築物の大半が木造、また、河川管理のための土木技術が未発達な段階の社会においては、人々は常に災害と背中合わせの状況であった。「聞書」に記録された災害は、主として大坂両替店か三井全体の活動する地域に発生したものであったことが指摘される。言い換えれば大坂・江戸・京都といった三井の店舗が所在する都市、またはそれらの都市を結ぶ街道沿いの地域であった。金融事業を行う大坂両替店として、大坂をはじめとした三都における災害が大きな関心事であったことは想像に難くなく、

また、三都以外であっても広範囲に被害をもたらす事象には関心が払われていたといえる。

さまざまな情報のデータベース化など不可能であった江戸時代において、過去の諸事象を書き留めたものであった「聞書」の記録は、大坂両替店の奉公人にとって貴重なものであったと考えられる。災害関係の記事に限らず、その内容は体系化されていたわけではなかったため、これらの記録が実際にどのように利用されたのかは明確ではない。しかし、数十年あるいは100年以上にわたる社会の動きに関する記録は、後世の奉公人にとってはさまざまな経営上のリスクを知ることでできるものであったといえる。例えば、ほかの経営帳簿などと組み合わせることで過去の諸事象への大坂両替店としての対応を参照することも可能であったかもしれない。数十人も奉公人を雇用する大店にとっては、事業を継続するための情報の共有やノウハウの継承は常に大きな課題となっていたのは確実であろう。「聞書」における災害に関する記録はそうしたことに対応するための側面を有していたのではないだろうか。

今回の検討をふまえて、今後の課題としては次のような点が挙げられる。1点目は災害記事の内容に関する検討である。具体的には、それぞれの災害についての記事を詳細に読み解くことで、内容の検証を進めていくことが考えられる。「聞書」の記述内容は精査されているわけではないため、誤りが含まれている可能性もあるためである。また、それに関連して「聞書」に記録されなかった災害との相違についてもさらに深い分析が必要であろう。2点目として、災害に関する記事の位置づけの整理を進めることが挙げられる。これについては、「聞書」の記録全体、つまり災害以外の記事の内容をふまえた位置づけ、あるいは「聞書」以外の三井文庫所蔵資料に含まれる災害関係史料との位置づけが深める必要がある。こうした作業を通じて「聞書」の災害関係記事がどのような意義を持つのか、明らかにしていくことが必要であろう。

#### [付記]

本研究にあたって、資史料を閲覧・利用させていただいた三井文庫本館（史料館）の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

- 1) 「聞書」のほか、三井大阪両替店では、日ごとの営業上の事件を記録した「日記録」、抱屋敷に関する諸文書を書き留めた「永禄」、町触等を書き留めた「御触帳」、その他諸種の文書を書き留めた「後鑑」などが作成された（岩田1993）。
- 2) 「聞書」のうち現存する7冊は三井文庫本館（史料館）（東京都中野区）に所蔵されている。なお、「一番」（寛延4（1751）年～文化4（1807）年分）については2011年に翻刻・刊行済みであるため、本稿では「一番」のみ翻刻版（三井文庫2011）を、その他については三井文庫所蔵の原本を利用した。
- 3) これまでの研究では、幕末における情報流通との関わりを論じた藤田（2000）などが挙げられる。
- 4) 享和2（1802）年の洪水を取り上げた最近の研究として、例えば、島本（2019）は三井文庫所蔵の絵図を利用して災害刊行図の出版の実態、さらには災害情報の流過程について分析を行っている。

#### 参考文献

- 岩田浩太郎：三井大坂両替店記録における天明の大坂および江戸打ちこわし関係史料について，三井文庫論叢，27，pp.183-243，1993.
- 宇佐美龍夫 他：日本被害地震総覧599-2012，東京大学出版会，2013.
- 島本多敬：19世紀初頭の災害図出版における書肆の役割—1802年淀川水害の事例から—，人文地理，71-1，pp.7-28，2019.
- 東京大学地震研究所：新収日本地震史料（全21巻），東京大学地震研究所，1981-1994.

西坂 靖：三井越後屋奉公人の研究，東京大学出版会，2006.

藤田 覚：近世後期の情報と政治—文化年間日露紛争を素材として—，東京大学日本史学研究室紀要，4，pp.49-70，2000.

三井文庫：資料が語る三井のあゆみ，吉川弘文館，2015.

三井文庫：三井文庫史料叢書 大坂両替店「聞書」1，吉川弘文館，2011.